

墓に用いられるモノと記憶

現代沖縄の造墓からみた墓制の変容

Tomb as Memory Storage Medium and Change of Tombstone Materials :
A Study on the Grave System in Contemporary Okinawa

越智郁乃

OCHI Ikuno

はじめに

①戦後まもなくの造墓の変化

②本土復帰後の造墓

③集合墓地への造墓

④考察

⑤現代沖縄におけるメモリアリズムと墓の行方

【論文要旨】

これまでの沖縄における墓制研究は、沖縄内各地域の墓制のバリエーションに関する研究が蓄積されている。一方で、17世紀に中国から琉球王府の士族層にもたらされた墓地風水に関する研究が行われてきた。傾斜地に横穴式に掘込み、後方の高い風水土吉型をなす墓形は、19世紀末から20世紀初頭にかけて沖縄の庶民層に広く普及した。沖縄において墓は「あの世の家」であり、その快適さ如何によっては子孫に影響を及ぼす存在であるという言説は、現在でも広く存在する。

しかし1945年以降、政治経済的な中心である沖縄本島への地方からの人口移動と都市化が進むことで、墓のあり方は変化した。火葬の急増に伴い洗骨が減少すると、墓は小規模化した。また、コンクリート建材の使用によって平面立地が可能になり、1980年代以降の経済発展に伴い日本本土から墓石業者が参入し始める。このような墓の形状変化とともに、戦後、都市部に移住した人々が、祖先祭祀の対象として欠かせない墓を移住先に新たに作り、元の墓から遺骨を移動させる事例が散見される。以上のように今日、沖縄の墓制を取り巻く環境や状況は大きく変化している。しかし、それに伴う人々の宗教実践や墓に対する認識がいかなる変容を遂げているのかということについて、従来の地理的区分による墓制研究や墓地風水研究だけでは対応しきれていない。

そこで、本稿では現代沖縄の都市部における移住者の墓造りを事例として取り上げる。新たに墓を造る際に墓に用いられる物質(モノ)の変化に注目し、いかなる過程から新たなモノが導入され、いかに用いられ、それが墓として機能していく中でどのような変化を遂げているのかということ明らかにしながら、現代沖縄の墓制の変化について考察する。

【キーワード】 集団墓地、記憶、故郷、家、都市化

はじめに一問題の所在

本稿では、沖縄本島都市部に流入した移住者が造墓の際に用いる物質（モノ）の変化に注目し、現代沖縄の墓制の変化について論じることを目的とする。

(1) 沖縄の墓制研究と都市化

沖縄の墓制研究は、自然洞穴墓にはじまり平地に小屋式に建てられた墓にいたるまで、歴史的変遷 [小川 1987, 酒井 1987, 平敷 1995 など]、または各地域の墓制のバリエーションに関する研究 [名嘉真 1979 など] が多数蓄積されている。沖縄では一つの地域の中にも、村墓、模合墓、門中墓、家族墓といった所有形態や規模の異なる墓が混在し、複雑な墓制を形成してきた。その呼称も、シンジュ、チカジュ、ハルヤー等、地域により多数存在する。また、直接経験的具象的な祖先を祀る墓に対し、系譜上のつながりがある間接経験的観念的祖先あるいは伝承的な祖先のようなイデオロギイ的抽象的祖先の墓は、聖地信仰とも密接な関係がある [名嘉真 1979]。

墓制のバリエーション研究とともに、墓地風水の受容に関する研究も進められてきた。17世紀に中国から琉球王府の士族層にもたらされた墓地風水は、傾斜地に横穴式に掘込み、後方の高い風水上吉型をなす墓形の庶民層への受容とともに、19世紀末から20世紀初頭にかけて沖縄に広く普及した。墓に用いられるモノに注目すると、それらの墓の多くは琉球石灰岩を用いて、外面を整えている。例えば16世紀に作られた琉球王統歴代の墓である「玉陵（タマウドウン）」は、破風墓と言われる家型の墓である。琉球石灰岩を用い、三角型の屋根に切り石積みの墓室を持つ。玉陵の形に代表されるように、沖縄において墓は「あの世の家」であり、その快適さ如何によっては子孫に影響を及ぼす存在であるとされる。そして、「人間は借家住まいもできるが、死人の借り墓はできない」という言葉が繰り返し語られる。沖縄の墓地風水について北部から与那国まで調査した渡邊も、墓は家よりも日取りや場所の選定が慎重に行われることから、家相よりも墓相が子孫に影響を与えるものと考えられていると考察している。また、「お墓はこれから永遠に住む家なのだから、立派なものをつくりたい」「お墓は何万年も住むべき住まいである」という語りから、生者の住む家よりも死者の家たる墓の永続性の志向を指摘している [渡邊 1994 : 118-120]。

しかし、琉球処分をへて急速に日本の制度に組み込まれていく中で、沖縄において行われてきた洗骨も不衛生とみなされ、施策として火葬が奨励された。特に、戦後の火葬の急増に伴い墓の中で遺体の腐敗を待つ場所であるシルヒラシが必要なくなったことで、墓内空間は小規模化した。また、コンクリート建材の使用によって傾斜地に掘込まずとも平面への立地が可能になったことにより、墓の形状は大きく変化した。沖縄全域の墓制を詳細に研究してきた名嘉真も、「墓は私たちの社会に普遍的な存在であり生活から切り離せないが、全般的な傾向としては社会の近代化に伴って墓制が盛況を極めつつある」と述べる。その背後には宗教的職能者ユタの関与があり、「祟り」に対する恐怖感に支えられて墓制が根強く維持されてきたとも指摘する [名嘉真 1979 : 128]。

一方で、1950年代の都市計画による集団墓地の誕生と本土復帰により沖縄にも日本国内法であ(1)
地埋葬法が適用されることで、墓地は行政の管理対象物として考えられるようになった。沖縄県に

おける集団墓地は、第二次世界大戦後の復興と、その後の都市化によって誕生した。那覇市が戦後行った都市計画の区域内に存在する墓地の移動先の必要性から、初の集合的な公営墓地として1956年に識名霊園が設立される⁽²⁾。名護市(1963年)、浦添市(1968年)が那覇市に続き、都市計画法の中で公営墓地を整備することになった。しかしながら初期の公営墓地は、都市計画による区画整理の対象地にある墓地の代替地として設立されたものであり、「寿陵」による生前建墓は対象としていなかった。また元来、集合墓や門中墓は私有地に設けることが多かったため、戦後増加した小規模な家族墓は霊園以外の私有地へ無秩序に造営されることが多かったと推測される[沖縄県福祉保健部2000]。

1980年代になると法人による墓地設立が増加する。墓地統計資料(章末表4参照)をみると、1980年代は一法人につき50基前後の小規模な経営であったが、1990年代以降は一法人につき100~300基に増えている。都市計画の代替である公営墓地と異なり寿陵が可能で、予算に応じた墳墓の規模・設置面積の選択肢がある宗教法人や公益法人経営の墓地は、現在も人気が高い。

そもそも集団墓地は利用者が土地を取得する必要がないため、地価の高騰とともに集団墓地に墳墓をもとめる人が増加したと考えられる。それに加え、清明祭や十六日祭などの際に長時間墓で過ごすことの多い沖縄では、交通の便がよいか、駐車場・水道・トイレが完備されているかどうかといったことが墓選びの際に重視される。また、民間経営の墓地では墓に関する行政での手続きの代行を行い、公営よりもきめの細かいサービスによる付加価値で利用者の増加を図っている⁽³⁾。例えば、購入段階においては予算に応じて様々な値段と区画の墓地を設定したり、新設した墓の祝いの際には、テントや椅子を貸し出したり、金額に応じて供物料理の準備も代行する。さらに、墓参に際して一休みできるような休憩所を設置したり、定期的に掃除をおこなったりするメンテナンスも欠かさない。これらの対応は利用者に好評で、じめじめして草に埋もれやすくハブが出没する危険で陰気な墓のイメージを一新したと語る利用者もいる。このように墓の造営や儀礼は現在、商品経済の中に組み込まれているのである。

集団墓地という規格化された土地において墓を作る場合、本土型墓石業者が参入により、それまで用いられていた琉球石灰岩を積んだ墓に代わって、輸入石材、特に花崗岩が用いられるようになった。このような変化の結果、現在は集団墓地以外に墓が作られる場合でも、輸入石材が用いられている。それに対し、歴史建造物としての墓への対応は異なる。先述した玉陵は沖縄戦により外面が破壊されたが、戦後、琉球石灰岩を用いて再建された。また、琉球王朝の最初の王墓であり玉陵同様に戦時中被害を受けた「浦添ようどれ」も、琉球石灰岩の壁面を整えて2005年に再建された。玉陵、浦添ようどれともに現在追葬者はなく、歴史観光の地として資源化されている。その一方で、沖縄に暮らす人々にとっては「琉球最初の墓」として信仰の対象とされている。ある種理想化された「伝統的な墓」に対し、コンクリート建材や輸入石材といった「新しいモノ」を用いた墓は「ヤマト墓」と総称され、墓制研究で取り上げられることはほとんどない[越智2012]。

このような「新しいモノ」が研究対象から除外されてきた状況は、民具研究の流れとも重なる。朝岡は、現代の変化の様相を眺めると、かつて私たちが無前提に「伝承的なモノ」と捉えてきたものも実は「新しいモノ」との関わりのなかで変貌を遂げていたはずなのであると述べる。これまで、「新しいモノ」と「伝承的なモノ」との間の相互影響・相互依存・役割分担などの具体的な関係は、

ほとんど研究されてこなかった。一般にはごく単純に「伝承的なモノ」から「新しいモノ」へという、一方的な流れとして描かれているにすぎない。「伝承的なモノ」と「新しいモノ」を対比的に捉える静的な秩序認識にたった研究には限界があり、むしろ「新しいモノ」との動的な関係のなかで、「伝承的なモノ」を把握し直す努力が要求される。今や、「伝承性」を「モノ」総体の変容のダイナミズムの中で考え直す必要がある〔朝岡1996:72〕。

これらの議論を本論と接続させるならば、「伝承的な」王墓を偏重するだけではなく、「モノ」としての「墓」の移り変わりと「人」の関わり合いに注目する必要があるのではないか。墓を造るという行為は、そこに生きる人々の生の営みに他ならない。墓を造る過程に加えてその後墓で行われる祭祀、掃除や改修工事という長期間の実践とそこでの語りを資料として墓と人々との関わりを詳細にみると、行政や業者などいくつかのエージェントの介入によって、造墓に関して様々なバリエーションを生んでいるという側面もある。また、従来の墓にはなかった墓石への刻字や墓碑という文字情報の追加により、ルーツや故郷観などの記録や記憶を外在化する媒体としての役割を墓に与えていた。そして墓祭祀を通じて情報が参照される過程で、墓は「故郷」を喚起するモノとして人々に影響を及ぼしている。このように、用いられる物質や形という「モノ」が変化しながらも、それらの「モノ」が集まって墓は形作られ、墓として存在していることが明らかになる。墓を単に客体として操作される物体として捉えるのではなく、複雑に絡み合いながら継続する墓と人の相互作用に注目する必要があるのだ。



写真1 玉陵 撮影地：那覇市

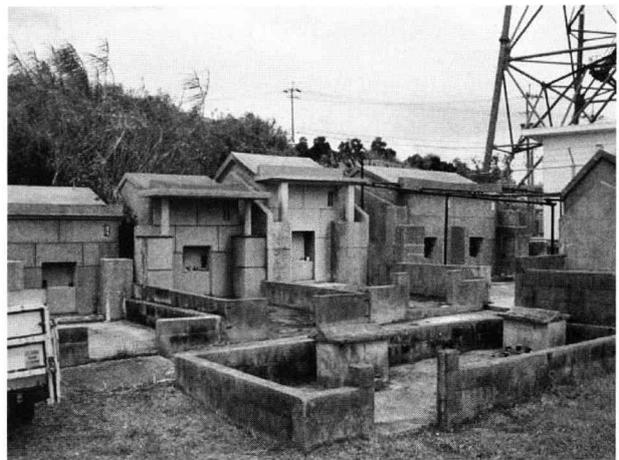


写真2 戦後増加したコンクリート製の家型墓
撮影地：那覇市



写真3 1980年代以降増加した花崗岩による墓と集合墓地
撮影地：那覇市

(2) 都市化と移住者

「新しいモノ」に加えてもう一点注目したいのは、移住者の存在である。第二次大戦後の沖縄本島中南部の都市部を形成したのは、沖縄各地からの移動してきた人々でもある。戦後の沖縄では、各地で人口が増加した。しかし、経済状況の変化や高等教育化とそれを支える現金収入の必要性から、本島中南部の都市部への人口の大量移動を生んだ。移動した人々がやがて定着することで、本島中南部の都市化が進んだのである。

地方からの送り出し要因としては人口に見合った仕事がない、また農業が中心の地域では土地の分散を避けるため長男以外が土地を相続できない場合に他出するしかないというような理由が挙げられてきた。特に戦後の沖縄では基地を中心とした経済政策が優先されたため農業政策が十分に行われず、各地域の農業経営は厳しかった。亜熱帯の気候的特質からサトウキビとパイナップルへの偏重政策がとられるようになるものの、その後輸入品に押されパイン農家および産業は衰退してしまう〔戸谷 1999〕。生産増大に成功して収入が増大したサトウキビ農家でも、農機具、肥料の輸入により結局借金が増大し〔渡邊 2002:267〕、その結果、外に現金収入を求めることになったのである。

受け入れ要因としては、本島や離島でもその地域の中心となった島で現金収入を得られる仕事が多く存在したことが挙げられる。特に本島の基地建設ラッシュや那覇地域の復興により、建築業を中心とした仕事が豊富に存在した。その結果「出稼ぎ」のために都市部で職に着いた後、次第に家族の呼び寄せによって挙家して出身地から移動した事例が多く見受けられる。

このような要因から移住した人々は、移住先における同郷団体や出身地集落単位の祖先祭祀、さらにはそれぞれの家の祖先祭祀や死者儀礼を通じて出身地域との紐帯を保ってきた。自身の結婚や自宅の建設、子供の誕生・成長・結婚を通じて次第に都市部への定住が意識されはじめると、移動先で墓を求め始める。出身地に残してきた墓があれば、現在の居住地近辺へ墓を移動することが意識され、実際に墓の移動に向けて動き始める〔越智 2008, 2009b〕。

例えば、八重山の習俗を生活者の視点から著した『八重山生活誌』において宮城は、「(第二次世界大)戦後は本土や本島に職場を求める者が急増し、家族引き揚げの家庭が年々多くなり、墓所を移動しはじめている」と述べている。このことから、移動先において新たに墓を造営する家族単位の移動者の増加がうかがえる。また「遺骨を引き上げる時には、これまで洗骨されている遺骨は合同して焼き、小さくしてお伴するようになっている」とその移動の様子についても著述されている〔宮城 1972:493〕。

このように移住者が墓を移動させる背景には、十六日祭(あの世の正月)、清明祭、葬儀、年忌など墓において行われる祖先祭祀や死者儀礼が数多く沖縄に存在し、墓の存在を意識化する機会が多いということがある。墓の近隣に居住していれば祭祀や儀礼を十分に行えるが、墓と居住地が離れている場合、儀礼が十分に行えず何らかの不足があれば子孫に災いが降り掛かるかもしれない。移住者にとって、絶えずその不安が生じるという。供えの不足が招く災いと不安に備えて墓を現在の居住地近辺に移動することは、移住者にとって祖先祭祀を継続しようとする実践に他ならない〔越智 2009a〕。

しかし、シマと呼ばれる集落中心のミクロな民俗事象を蓄積してきた民俗学や、位牌祭祀の面か

ら親族の動態を取り扱ってきた民族学において、出身地の墓から離れて新たな墓を造る移住者の行為が取り上げられることもほとんどなかった。既存の沖縄研究における祖先祭祀に関する研究は、祖先の誕生である「死」を基点としてどのような儀礼を受けるのか、どのように位牌が祀られるのかという観点から研究がされてきた。いわば祖先として「祀られる側」を中心にした研究である。

一方で、移住者に対する研究は社会学を中心に行われ、移住先での同郷者団体の結成や互助活動から沖縄社会及び沖縄の都市地域の特性を明らかにしてきた。同郷人結合組織である「同郷会」について研究した石原は、石垣市における波照間郷友会墓地・納骨堂の成り立ちについて述べている[石原 1986: 67]。波照間島は、石垣島から約50km離れたところに位置し、石垣島からは高速船で約一時間かかる。波照間島には高等学校以上の教育機関が存在しないため若年層をはじめ多くの人々が石垣へ、また石垣を経由して本島へと移動している。しかし石垣島に在住する波照間出身者が亡くなったとき、墓を開けるのに適さない年であれば波照間にある墓に納骨ができない。遺骨を石垣の寺に預けようとするれば、その費用がかさむ。このような状況を打開するため、郷友会会員の強い要望で郷友会墓地及び納骨堂が1967年に誕生した。しかし、石原は基本的にムラ社会の延長としての郷友会とその機能と役割の変容を中心に扱っているため、墓自体の変化には触れていない。

以上の議論を踏まえて、本稿では現代沖縄の都市部における移住者の墓造りを事例として取り上げる。新たに墓を造る際に墓に用いられるモノの物質的な変化(モノの変化)に注目し、いかなる過程から新たなモノが導入され、いかに用いられ、それが墓として機能していく中でどのような変化を遂げているかということを中心にしながら、現代沖縄の墓制の変化について考察する。

①……………戦後まもなくの造墓の変化—奥郷友会共同墓地を事例に

本節では、沖縄本島北部の奥地区出身者らによる奥郷友会共同墓地の事例を取り上げる。本島北部の農村である奥地区では、戦後、本島中南部において増加した米軍基地建設や基地産業の労働需要から、移住者が増加した。1949年、戦前からの移住者を中心に戦後の移住者を加えた「奥人会」が那覇において発足し、親睦を深めるなかで各自の住宅建設にもお互いに力を貸したという。その後の出稼ぎ者の増加から、組織的に会を運営する必要を感じた奥人会の中心人物らが、1951年に在那覇奥郷友会を結成した。そこでは「故郷の奥地区の伝統を大事にしながら、会員相互の親睦扶助を図り、子弟の教育活動を盛んにし、会員一人一人の発展に期していく」ことを会の存在意義としている。実際には年一回、合同生年祝を兼ねた総会を行っている。そして、もう一つの重要な活動が共同墓地の建設であった。

(1) 共同墓地建設の経緯

葬儀や十六日祭のための帰省が困難であった移動前の状況について、墓地組会の会長を務めた男性は以下のように語る。

「バスで那覇をでると名護で乗り換えて、北部に着くのは夕方。あとは奥まで歩いてしかいけない。

着くともう夕方だった。着いた日は泊まって、翌日が正月や十六日とかで、その日も泊まる。そうすると帰る日を入れて三日も休むことになる。誰か亡くなった場合はなおさら帰らないといけない。しかし軍の仕事は三日も休むとすぐ首をきられるので皆困っていた」

(70歳代男性, 2011年聞き取り)

そこで同じ様な状況にあった奥地区出身者の中から、共同で墓を造ることを考えついたという。「共同」で墓を作るということにはいくつか理由がある。一つ目は都市部で個人的に土地を求めることは難しかったという事情があった。そこで1954年に共同墓地発起人の中心人物であった三名が連名により、那覇市の地主から当時の価格9,600B円にて土地を購入した。本事例において共同墓地を造る過程で興味深いのは、発起人を中心に16名が基となって墓地建設組合を結成したということである。同じ奥地区出身者の中で那覇市での墓を求める者16名の一人一人を「株持ち」と表現している。株持ちに対しては、奥地区で同じ「門中」⁽⁵⁾であった人々が賛同し、株持ちに対して出資するという形式をとっている。例えば、奥地区でA門中⁽⁶⁾であった人のうち、一人が株持ちとなったとする。その株持ちに対して同じA門中⁽⁶⁾であった五つの家の長が同じく墓を造ることを希望し、株持ちに出資をすることで、五つの家の家族及びその子孫が新しく造った墓の成員権を得るのである。その16名を中心とする株の集団で一人500B円の模合を行い、造墓資金を集めた。

しかし、墓を急ぎ造りたいという皆の希望から、模合なかばで着工に踏み切った。資金が集まりきらない中で着工を行えた理由は、同じ本島北部出身であったセメント会社社長から信用貸しで材料を購入できたことと、北部において建築業を営んでいた株持ちの一人が、米軍関係者から鉄筋やセメント材を得ることができ、材料費を安くあげることができたためであるという。墓は、出資者一人一人の労力を提供する形で建設された⁽⁷⁾。参加者によると造墓予定地は、当時は何もない丘陵地帯であったため、水汲みが最も困難であったという。皆の結（共同労働）により、のべ二ヶ月半を費やして共同墓地が完成した。

(2) 完成後の墓地と60年間の変化

完成した墓の形は、17の墓口を持つ17基のコンクリート製長屋形式の家型墓である。各割当は、くじ引きで行ったという。内1基は、出資者以外の奥地区出身者が亡くなった場合に使用する郷友会墓として造られている。墓には、それぞれの株持ち以下の成員が、奥地区で使用していた墓から、既に亡くなり葬られている上位世代の遺骨を取り出し、那覇の新しい墓に納骨を行った⁽⁹⁾。

墓地完成後、共同墓地において清明祭が始められるようになった。聞き取りによると「村では士族層の祭りだった清明祭を、共同墓地では

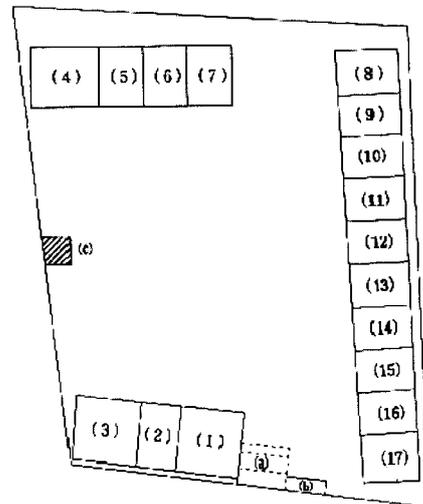


図1 共同墓地の配置図(共同墓地組合誌より)。(数字)は、各親族集団を示す。

皆でやるようになった」というように、もとの奥地区では行っていない祭祀が移住先で追加されることになった。このように、新しい墓では、もとの奥地区で行っていた十六日などの墓祭祀などに加え新たな祭祀が加わるとともに、墓のある土地を含む様々な変化が見られる。以下の表にその変化をまとめた。

ここでまず注目したいのは、コンクリート建材の導入過程である。先述したように、本事例の造墓過程においてコンクリート建材を用いていた。その理由について、墓地組合長を務めた男性に聞き取りをおこうと以下のような回答を得た。

「コンクリートを使ったのは、新しいものがよいものだという気持ちから墓に使った」

先述したように、現在の墓制研究においてコンクリート製の墓のように「新しいモノ」を用いた墓は取り上げられることはない。しかし、基地建設を契機に沖縄に広がったコンクリート建材は、多くの建物、家屋に用いられている。そして、「死者の家たる墓」に関して、「新しいものがよいもの」という考えで用いられたということが明らかになる。墓の快適さ如何で先祖は子孫に影響を与える存在であることは既に述べたが、その快適さの追求から、生者の家屋と同じ建材を墓に用いたといえる。

コンクリート材への変化には、沖縄の気候も大いに関係する。沖縄では台風などの雨風、または強烈な日差しによって、墓石が劣化していく。そのため、劣化の度合いによって改修を繰り返す必要がある。石というモノは、紙や木を用いたモノと比較すると変化しにくい。しかし、墓石に用い

表1 奥地区共同墓地の変遷⁽¹⁰⁾

1954年	土地取得。共同墓地建設。墓の祝いを行う。
1963年	幼児用墓を造る。日よけ用の木を植える（1980年に伐採）。
1967年	郷友会主催による13周年記念祝賀会。
1979年	郷友会墓の改修工事。
1982年	郷友会とは別に共同墓地組合を結成。 郷友会内で個別に墓を建設する人が増えたため、郷友会会合とは独立する形で共同墓地組合を結成する。会長、副会長、書記、評議員をおく。会合は共同墓地で行う。
1983年	生活改善運動の影響で奥地区では新暦で行ってきた十六日祭を、那覇近郊の行事暦である旧暦に移行。墓地で旧十六日祭をおこない、終了後に墓地組合会合を開催 ⁽¹¹⁾ 。排水溝、焼却炉造成。
1984年	30周年記念祝賀会を共同墓地にて開催。記念石碑建立。
1990年	郷友会墓改修工事。郷友会からの出資10万円。
1992年	清明祭の際に共同墓地全体改修工事の件を承認。 墓の外面を自然石風に改修。合計115万円（株当たり6万8,000円）。
1994年	40周年記念祝賀会を共同墓地にて挙行。 共同墓地で行った臨時総会にて共同墓地記念誌発行決定。

られるコンクリートの材料であるセメント材（石灰石やケイ石，粘土の混合物）や自然石であっても，風化による劣化は免れ得ない。建墓当時は琉球石灰岩を用いていたとしても，その後改修するうちにセメント材で表面を塗り固めていく事例は多い。それは墓として使い続けるために必要な行為だといえる。「伝統的な墓」の典型と見なされる王墓の場合は追葬者がなく歴史文化財として扱われているため，現状維持や保存・復元という観点から石灰岩⁽¹³⁾が利用されている。それに対し「使い



写真4 奥郷友会共同墓地。墓口の上に表札が見える
撮影地：那覇市

続ける墓」には「使い続けるための改修」として，その時々「よいモノ」が墓に使われているのだ。

コンクリートの墓の表面は，年表資料にも挙げたように，1992年に外面が花崗岩風に改修された。その理由も同じく「新しいものはよいもの」という考えに鍵があると考えられる。1980年代以降，本土からの墓石業者が増加し，新たに造られる墓の多くは花崗岩の墓石に変わっていった。よって，1992年の改修時には花崗岩の墓石による墓が主流になりつつあり，実際奥の共同墓周辺の墓も花崗岩による墓が増加している。そこで，次節では，花崗岩でできた新しい墓を造った移住者の事例を取り上げる。

②……………本土復帰後の造墓—宮城家を事例に

上述したように『八重山生活誌』には，「戦後（第二次世界大戦後）は本土や本島に職場を求める者が急増し，家族引き揚げの家庭が年々多くなり，墓所を移動しはじめている [宮城 1972：493]」との記述がある。著者である宮城文も，この6年後に宮城家の墓の移動を経験している。

本節では，宮城文の子息である宮城信勇氏への聞き取りを行い，宮城家の造墓，及び新しい墓での儀礼に関する事例を通じて，本土復帰後の墓制について検討したい。

表2 事例2 17代目宮城信勇氏の略年表と墓・仏壇の移動

1921年	石垣にて誕生。台湾の中学卒業後，熊本を経て，東京，横浜で働き，終戦。
1946年	家族とともに石垣に引き揚げる。
1955年	父親（16代目）が死去。
1966年	琉球政府（後に沖縄県）の要職につくため那覇に家族で移動。位牌はその時一緒に持ってくる。2年弱の貸家生活を経て自宅を建設。
1978年	石垣から那覇に墓を移す。

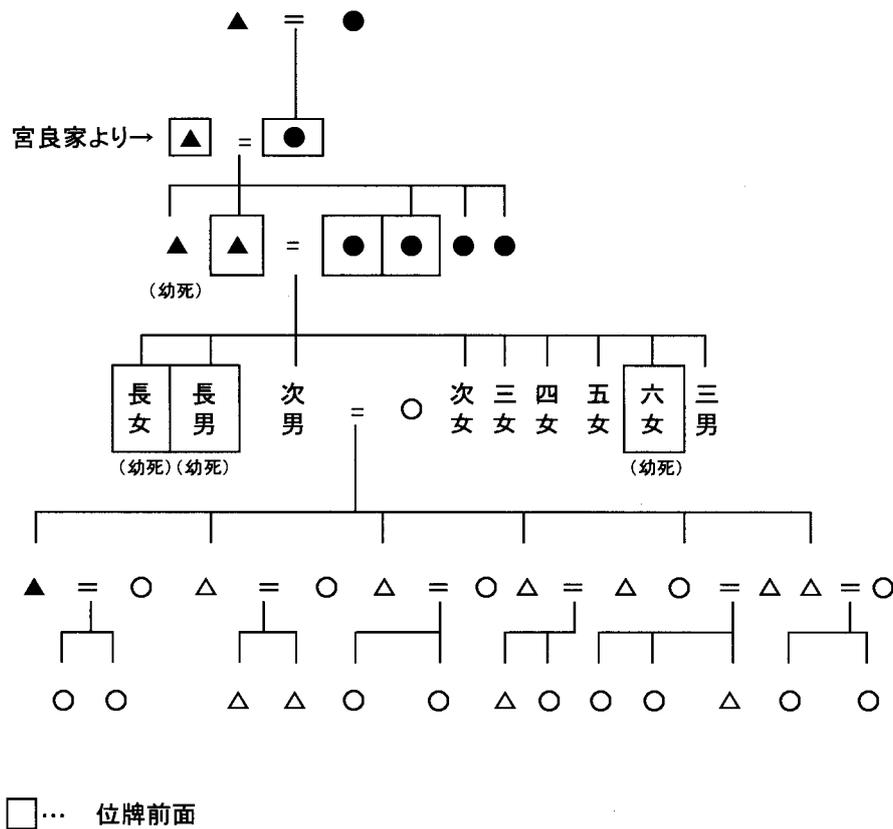


図2 宮城家系図

(1) 造墓の経緯

石垣において17代続く士族層であった宮城家は、この百年で二度の墓の移動を行っている。一度目の移動は石垣内で行われた。宮城家の『墓所新築日誌』によると、1899(明治32)年旧七月より、石垣において親族らの結によって横穴掘り込み式の亀甲墓を新たに造営しはじめ、同年旧十月に完成とある。そして、元の墓から遺骨を納めた甕を、新しい墓に移動させたと考えられる。その際に「風化した古い骨をまとめたのではないか」と宮城家の継承者である信勇氏(系図中の次男)は語る。

二度目の墓の移動は、信勇氏が琉球政府に職を得たため、家族とともに1966年に那覇に移動したことに端を発する。当初、位牌是那覇まで一緒に持ってきたが、墓は石垣に置いてきた。そのため旧暦1月16日に行われる墓前祭である十六日などの際には、信勇氏が石垣まで戻っていたという。

その後、1978年に墓を那覇に移動している。墓は親族が共同名義人である土地を紹介された。その土地に墓石業を頼んで新たに墳墓を建設し、石垣の墓から遺骨などを移動している。

当時のことを信勇氏は以下のように語る。

「移動するにあたって石垣の墓を開けた。古いものは甕の中身がほとんどない。年月を経た骨は土になるんだよ。…(骨は)全部は運べないが、比較的新しい骨はそのまま持ってきた。(1960年代に洗骨された)兄、火葬された父、妹とオバ。だいたい50年くらい前のものまで持ってきた。」

洗骨した骨は墓庭で焼いてまとめた。火葬した骨はそのまま持ってきた。…夫婦二人だけで飛行機に乗せて運んだ。母がやり方を知っていたので、(今日多くみられる葬祭)業者や寺は頼んでいない。

那覇の新しい墓地は、人(親族)に頼んで作った。本土に住んでいたことがあるから、本土のような墓を自分たちも作ることにした。墓石は本土に注文して、家名もそこで彫らせた。当時(1980年前後)は『本土のものはよいもの』という認識があった。」

表2の略歴で示すように本土での生活経験がある信勇氏は、本土の墓の形態を見知っていた。そして、復帰後、石垣から那覇に墓を移動するにあたって、あえて本土の墓を「よいもの」として取り入れたという。事例1の奥郷友会共同墓地における掘り込み墓からコンクリート墓への転換同様、この事例でも、「新しいモノ」である花崗岩による墓を「よいモノ」として取り入れている。しかし、この事例ではコンクリート建材による家型の墓とは異なり、花崗岩によるプレート型の墓である。事例1の家型の墓とどのような点で違いがあるか、墓前で行われる儀礼を例に考えてみよう。

(2) 新しい墓での儀礼—十六日祭を事例に

旧暦一月十六日に、墓前で宮城家の十六日祭が行われる。八重山や宮古では十六日には墓に親族が集まり墓庭でご馳走を広げる姿がみられるが、特に新十六日、すなわち死者が出て初めての十六日は大きな儀礼を行い、墓前での焼香に訪れる人も多い。八重山地域においてこの日は小中学校も半日休みになるなど、地域行事としても重視されている。一方、沖縄本島及び周辺離島では、清明節から一ヶ月の間の週末に、墓前に親族が集う清明祭が行われる。十六日は死後三年以内の死者のために各家の仏前で行われるものであり、墓に親族が集うことはない。このように八重山・宮古とでは十六日の内容が異なるため、本島において十六日を行う場合は、平日であれば家族が昼間に集まりにくいことから、移動した家によっては十六日を墓前で行わず清明祭に移行する場合がある。奥の共同墓地でも、集まりやすい土日に開催できる清明祭に移行している。しかし宮城家では、墓が那覇に移ってから十六日は墓で行っている。

2007年に行われた十六日は平日であったが、仕事のある子供や孫も昼休みを利用して集まってきた。次男、婚出した長女、孫らを含めると約10名が首里にある宮城家に集まった。奥の共同墓地と比較すると参加は限定され、ここでは父系親族に限られている。本来なら墓前にシートをひき、料理を並べて皆で食べる。しかしこの日はあいにくの雨であったため、墓では焼香と供え物をして「今から家で十六日をしますよ」と墓に声をかけるのみにとどめた。墓に向いたのは、信勇氏、信勇氏の子供と孫(次男、長女、長女の娘)である。

宮城家の墓は霊園ではなく、那覇の古くからの墓地群の一角にある。あえて道路に面した場所を選んで造墓したという。本土の墓石業者に発注した墓石には大きく「氏」と「家名」が刻銘されている(写真5参照)。石垣で16代続く士族層である長栄氏(ちょうえいうじ)宮城家は、父親の代には石垣で一軒しかいなかった。そのため「石垣(出身)の人が墓の前を通りかかったら車で通っていても、『ああ、あの宮城家か』と分かるんだ」と信勇氏は述べた。また、墓地の左奥には、ツゲの木が植えられている(写真6参照)。この木は、石垣の家の庭にあったものを移植したものである。それを指して信勇氏は「あんなに小さかったのに今は大きくなった」と語った。



写真5 宮城家の墓 撮影地：那覇市



写真6 石垣の家の庭から那覇の墓庭に移植されたツゲの木

その後、自宅の仏壇でも焼香を行った。次男料理や菓子を供えた仏壇を前にして、車座に座った。出される料理を皆で食べながら、亡き母親・宮城文の思い出などを語りあっていた。後日筆者が本島で盛んな清明祭に移行しないのかと尋ねたところ、「家訓で必ず祖先の祀りはしろと親父から言われている」と強い口調の答えが返ってきた。

以上のように墓で行われる十六日祭の様子からは、墓石の刻銘及び墓地に移植された木などのモノを通じて、宮城家のルーツが石垣にあることが強調され、墓で行われる儀礼を通じてそれが次世代に参照されている。

③……………集合墓地への造墓—佐久本家を事例に

三つ目に取り上げるのは、与那国島から沖縄本島に墓を移した佐久本家（仮名）の事例である。

(1) 造墓の経緯

与那国島は、沖縄本島から南西に約400kmの石垣島からさらに約120km離れたところに位置する面積約29km²の島である。主な生業は漁業、サトウキビ栽培を中心とする農業、酪農、観光業などである。戦後の間貿易で人口が1万人以上に激増したが、その後は一貫して人口流出が続き、2009年現在人口は約1,700人である。与那国島と石垣島との交通手段は、飛行機が1日1往復、小型飛行機便が週4往復（ともに所要時間30分）、フェリーが週2便（所要4時間30分）である。多良間島同様に、島内に高等学校以上の高等教育機関はなく、進学するためには島を離れる15歳以上の若年層が多い。

本事例の佐久本家の長男（50歳代）は、与那国で生まれ、本島・那覇の高校、本土の大学を卒

表3 事例3 4代目・長男の略歴と墓・仏壇の移動

1950年～	与那国にて誕生。中学までを与那国で過ごし、高校は那覇、大学は本土へ。本土で職に就いた後、沖縄に戻り本島で起業。両親（3代目夫婦）は与那国在住。この頃から墓と仏壇の移動するようにと長男に対して両親からの働きかけが強まる。
2001年	那覇に長男自宅完成、与那国から位牌を移す計画を進める。 12月：父親（3代目）、与那国にて死亡。与那国の墓に葬る。
2002年	3月：位牌を那覇長男宅に移動。
2006年	長男一家の干支と吉方位が合致した日取りが取れる。墓の移動に向けて動き出す。 10月：父の洗骨、他の遺骨を運び出し、火葬。同日、本島の新しい墓に遺骨を移動。

業した後しばらく本土で職に就く。父親は与那国町役場に勤務し、与那国から出て生活することはなかった。祖父の葬式のために長男が与那国に戻った際、先々佐久本の家を継ぐことを見据えた父親から、沖縄に戻ってきてはどうかと話を切り出された。父親の言葉に従い長男は30歳代で沖縄に戻り、本島で起業した。彼の同級生のうち約8割が沖縄本島で生活しており、生まれ島を出た後に本島で生活するというライフコースや、または仏壇・墓を移動させることも珍しいものではない⁽¹⁴⁾。次の継承者となる世代が現在住む土地と両親の住む家屋・仏壇そして墓のある与那国とに距離が生まれたため、将来的に仏壇や墓をどのように祀っていくかということは、佐久本家だけでなく他の家でも懸念されている問題である。

墓の移動は、2006年に行われた。与那国からの墓の移動は、役場の調べによると年に2、3件であるが、移動自体は珍しいことではないという⁽¹⁵⁾。佐久本家の墓は、墓に納めた父親の洗骨が終わらないうちは移動ができない。しかしこの数年は毎年墓が移せるかどうか、与那国の「日取り見」に日取りを見てもらっていた。それは与那国のやり方に精通した母でないと墓の移動に関わる様々な準備行うのは困難であると考えてのことで、「母が健康なうちに墓の移動を行いたかった」と長男は語った。そして2006年春頃、墓の移動が急に話がまとまった。与那国のやり方によると、「ヌチ（主）」としての長男の干支以外に、妻、娘にいたるまで干支をみて日取りを取る。そのため、複数人の干支によるよい日取りが合致することは非常に少ない。このような日取りのよさに加えて、その年が「ウンヂチ（閏月、与那国方言ではドゥイトゥッチと発音）」であることにも弾みがついたという。沖縄本島南部の南風原にある霊園に墓を購入し、与那国の墓での父親の洗骨と同時に、父以外の遺骨も含む移動を行うこととなった。同年の旧盆には兄弟姉妹が集まり話し合いをもち、準備を進めた。

同年10月、与那国の墓においてユタによる拝みを行った後、父の洗骨を行った。与那国では墓口を開ける「墓開け」を引き潮の時間に行うのだが、この日は引き潮が夜中の3時頃にあたった。「日取り」によって11日中に納骨まで行わなければならないため、どうしても11日午前の与那国から石垣へ向かう航空便に乗る必要がある⁽¹⁷⁾。そのため夜を徹して洗骨が行われた。既に洗骨が済んで入る遺骨の入った甕を運び出し、甕ごとに遺骨をバーナーで焼く作業を行ったのち、遺骨のみビニール袋に納められた⁽¹⁸⁾。

遺骨以外の残骸はすばやく墓の外に運び出され、手伝い人によってバーナーで燃やされる。すで

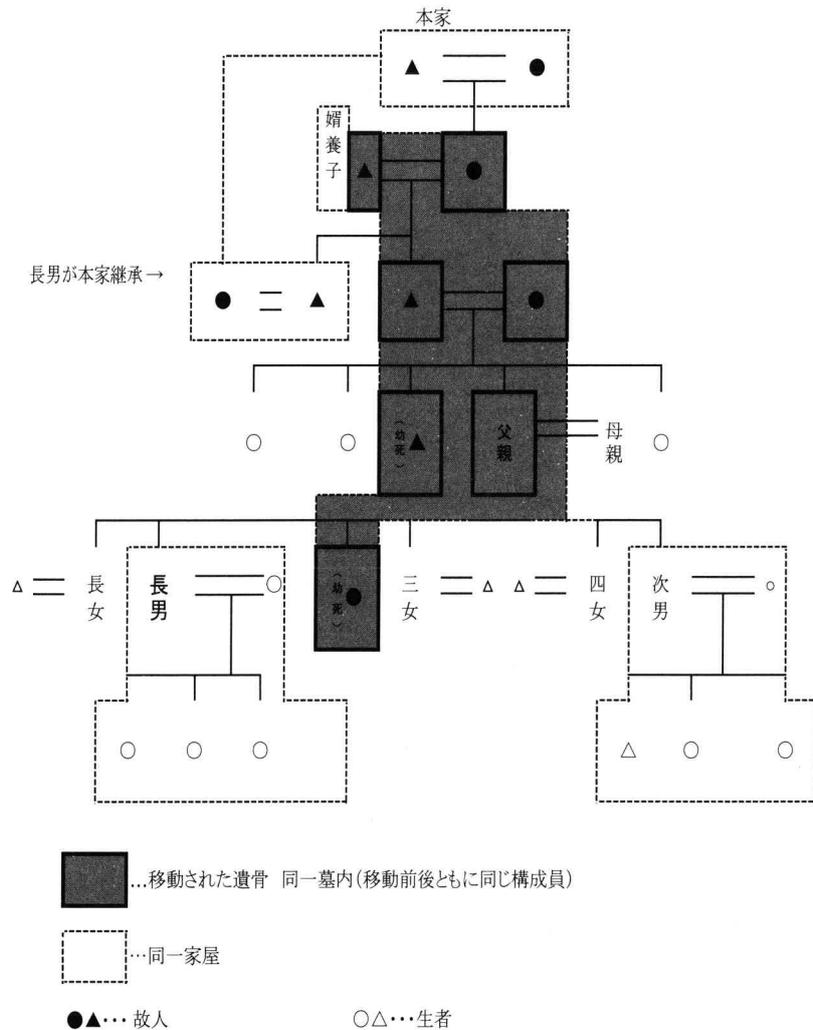


図3 佐久本家系図

に洗骨を終えて甕に納めてあった遺骨も次々と運び出され、残骸とは別の場所にひかれたトタンの上でバーナーを使って燃やされた。遺骨が納めてあった甕は、割って処分された。島内の墓の移動であれば甕は割らずにそのままもっていく。島の外に出すときは、割って処分される。墓内に甕とともに納めてあった副葬品である陶器類（食器として死者が生前使用していたもの）も墓から出されて、同じく割って処分された。

(2) 新しい墓

同日飛行機で移動し、本島南風原の集合墓地に造った新たな墓にて納骨式を行った。納骨式には与那国内外の親族（父方母方含む）のほか、本島に移動した与那国出身者（主に同じ集落出身）、長男の同級生らが集まった。新しい墓での納骨式は仏教僧侶が執り行った。読経に続き、周囲に米、塩を振り、納骨を行う。新たに準備された甕に、長男が遺骨を一袋ずつ移した。



写真7 佐久本家の移動前の墓と洗骨の準備
撮影地：与那国町

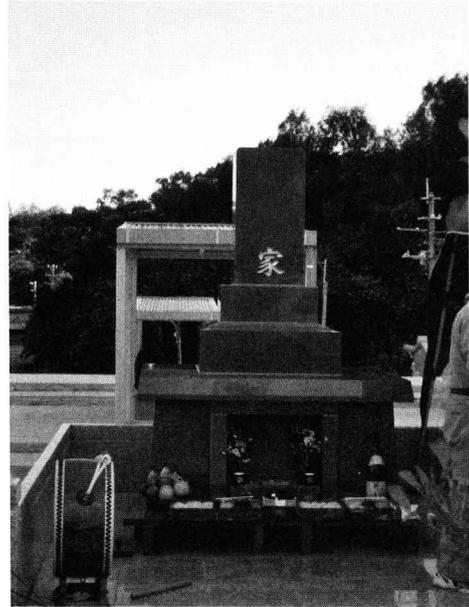


写真8 佐久本家の新しい墓
撮影地：南風原町

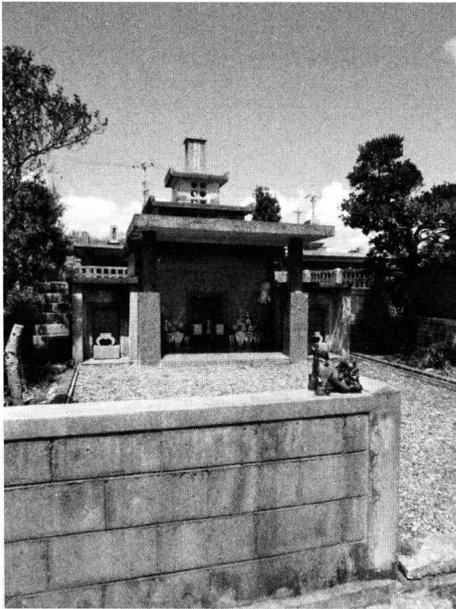


写真9 塔式の墓標を載せたコンクリート
造りの墓 撮影地：石垣市

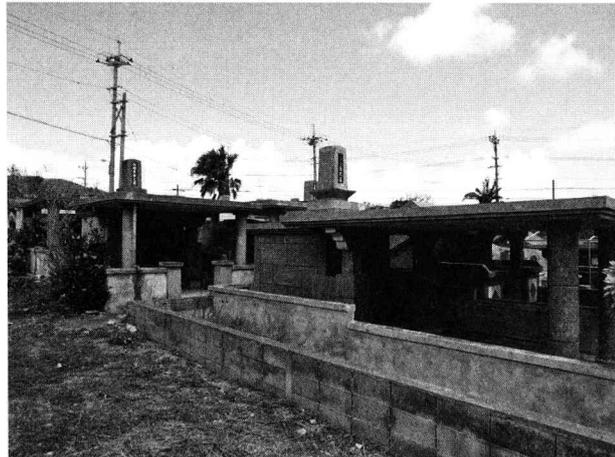


写真10 塔式の墓標を載せた花崗岩の墓
影地：石垣市

納骨が終わった後は、本島で生活する長男の同級生が三線で「ヨナグニンブチャー（与那国念仏歌）」を唄い、長男が太鼓を叩いた。この念仏歌は「親の恩は山より高く、海より深い」という「孝の精神」を謳ったもので、旧盆などの際に唄われるものである。

集合墓地は海が見下ろせる高台の上であり、県道からのアクセスも良い便利な場所にある。この墓地は与那国出身者である業者が関わっているため、購入を決めたという。新しい塔式の墓石には「佐久本家」と金文字で彫られている（写真8参照）。納骨式の際、それを見た沖縄本島生まれの次

男の娘は「内地のお墓みたい」と評した。しかし、この塔式墓は、八重山一般で近年広く普及している形状の墳墓である。この形式の墓は、沖縄本島ではあまり普及していないため、一見すると「ヤマト墓」と言われる本土日本に多く見られる塔式墓であると、沖縄本島の人々には分類されるのである。先述したように本土日本の業者から持ち込まれた規格化された墓石が多いが、沖縄各地によって普及している形状が微妙に異なる。そのため移動元の土地で普及している形状の墳墓を、新しい墓でもあえて用いたという。

④……………考察

以上、三つの事例を通じて、現代沖縄の都市部における移住者が新たに墓を造る際に墓に用いられるモノの変化に注目し、その導入過程や、その後の改修を通じた変化、新しい墓での祭祀について詳細を述べた。それを踏まえ以下では、(1) 墓に用いられる「モノ」から明らかになる墓の概念の変化、(2) 墓に新たに移入された「モノ」が現在どのような機能を果たしているのか、そして (3) 元の墓から何が移入されなかったのか、捨てられたのかという逆説的な分析を通じて、新たなモノによって構成される墓の機能について考察したい。

(1) 墓に用いる「モノ」の重要性—造墓過程、その後の改修を通じて

戦後の造墓とその後の改修過程において墓に使用されるモノの変化を通じて明らかになったのが、墓に「よいものを墓に用いる」という概念である。コンクリート建材、花崗岩はいずれも沖縄を取り巻く社会情勢と無縁ではない。とりわけ政治経済を支配した米軍、そして復帰後の日本からやってくる「外来」の「新しいモノ」が積極的に利用されている。

特にコンクリート建材は、戦後の沖縄復興を支え、現在の沖縄の特異な景観を作り上げたモノである。戦後間もなくはコンクリート建材の素材であるセメント材が日本から輸入されていたが、次第に細骨材として海砂を、粗骨材に石灰岩を用いて沖縄県内でコンクリートを生産・供給できるようになった。逆に木材は県内資源に乏しく輸入木材に依存していたため価格が上昇し、シロアリの被害も多発したことから、ますますコンクリート建材が建築資材として用いられた〔沖縄県土木建築部住宅課1996〕。このような米軍の基地建設技術を基礎とし、日本復帰とともに公庫貸付金政策の中で沖縄のコンクリート建築群は定着していった〔朝岡1989〕。朝岡はこれらのコンクリート建築群を、暮らしの変化に対応して地域文化を積極的に象徴するといった自己表現ではなく、あえて言えば、長持ちのする仮設的な建物であるに過ぎないと指摘している〔朝岡1989〕。しかし、家屋に用いるコンクリート材を墓に用いたことから、少なくとも墓を「家」として考えて、この世の家だけでなく、あの世の家である墓にも「よいものを用いる」ことで永続性が希求されている。そして、墓に「よいものを用いる」という考えが引き継がれたため、より永続性が期待される花崗岩が、コンクリート材の次の建材として用いられるようになったのである。

(2) 墓に移入された「モノ」—墓における「家」「故郷」の存在

しかし、本土からもたらされた花崗岩による墓石は単に持ちがよいだけでなく、墓の外面に文字

を刻むことを容易にした。元の墓と比較した際、新たな墓の最も目につく変化が、墓石に「家名」を刻むということである。事例1では、表札が墓の前面につけられ、後の30周年記念時には奥郷友会共同墓地を示す花崗岩の石碑が建立された。事例2や事例3では、墓石自体に家名が刻銘されている。

いずれも元の墓にはなかったものがこのように刻銘されるようになった背景には、墓石業者の影響がみられる。まず、画一化してコストダウンを図った墓石が供給されることは、なるべく安い墓を求める利用者の需要と合致している。そして、復帰以降の沖縄の経済成長期に本土から沖縄に参入した墓石会社の場合、本土ですでに一般的な家名の刻銘は当たり前のことであっただろう。一方で沖縄の利用者にとっても、新しい墓での家名の刻銘は必要なことであった。元の墓はいずれも集落に近い場所にあり、刻銘せずともどの家の墓かは皆が知りえていた。⁽¹⁹⁾しかし移動先ではその区別がつかないため、家名は標識として必要になった。

ここで重要なのは、家名の刻銘をすることによって、「家」の範囲が明確になったということである。刻銘のない元の墓では共同墓であったり、または家墓であっても被葬者の範囲は必ずしも明確ではなかった。しかし一旦家名を刻印することで、その墳墓に入ることのできる被葬者に明確な範囲を与えるようになったといえる。被葬者の名前の刻印は、時代が下るにつれ増加している。家名以外にも納骨されている者の名前が墓石に記されることで、墓の中に誰がいるか確認することができるのである。新しい墓において家名の刻銘及び被葬者の名前が記されるということを通じて、その墓を祀る人々は系譜を確認するのである。

さらに刻銘は「祀る側」内部だけではなく、外部に対しても情報を発信する標識となった。事例1, 2のように墓石に出身地や氏を記すことによって琉球王国時代に役人層であった士族の子孫であるということや北部集落の出身であるというルーツを確認するだけではなく、発信もしているのである。

刻銘による文字情報に加えて、墳墓の形状自体に「故郷」が表現される場合もある。例えば、事例3の新しい墓は一見「ヤマト墓」と言われる塔式墓のようであるが、実は八重山一般で近年広く普及している形状の墳墓である。先述したように本土日本の業者から持ち込まれた規格化された墓石による箱型が多いが、沖縄各地によって普及している形状が微妙に異なる（写真9, 10参照）。そのため移動元の土地で普及している形状の墳墓を、新しい墓でもあえて用いることで、「故郷」が表現される場合もある。

一方、元の墓に直接関係ないものも移入されている。事例2では、元の家庭に生えていたツゲが、墓庭向かって左手に移植された。墓庭の左手は右手より上位の位置とされ、八重山では「トゥディクン（土地君）⁽²⁰⁾」という土地神が祀られる場所である。新しい墓に土地神は祀られていないが、このような意味づけのある場所に元の家庭にあったツゲが移植されることで、墓自体が「故郷」及び「故郷の家」を想起させる標識として機能するようになったといえる。樹木は年を経るごとに茂り根付き、変化する。墓に出向いた際の「あんなに小さかったのに今は大きくなった」という語りには、樹木の成長とともに「故郷の家」から現在の「家」の繁栄も重ねて表現されている。

以上のように、納骨式だけではなくその後の墓前祭祀の度に、「故郷」や「故郷の家」そして故人に関する「思い出」が語られていることが分かる。このことから、墓はモノの変化を経て「死

者の家」から「家」や「故郷」の「記憶媒体」として機能が変化しつつあることが指摘できる。

(3) 墓に移入されなかったもの

以上の新しい墓を構成するモノは、遺骨以外は新しく出現したものばかりである。そこで、遺骨以外の何が「捨てられたもの」であるのか明らかにしながら、再度新しい墓に移入される「モノ」について考えたい。

新しい墓に移入されなかったものは、元の墓の墓石はもちろんのこと、移動まで遺骨を納めていた甕、香炉にまで及ぶ。遺骨がすべて運び出されて「空き墓」になる場合、それまで墓口を閉じる為に用いられていた石は割られ、墓口を開けた状態になる。また、洗骨された遺骨が甕に入っている場合は、焼くために遺骨を甕から取り出すと、元の甕は割って処分される。つまり、遺骨以外の元の墓にあった「もの」は新しい墓に移入されるどころか、ほとんどが破壊されてしまうのである。

例えば事例3では死者が生前使用していた食器類が副葬品として納められていたが、これも移動の際に割って処分された。副葬品であれば遺骨同様に新しい墓に納めそうなものであるが、なぜ持っていないのであろうか。その理由は二つ考えられる。一つ目は移動にかかる負担である。事例3では7体の遺骨を移動させるために旅行バッグを用いていた。島内の移動であれば遺骨を甕ごと移動させるのであるが、飛行機を乗り継ぎ移動する場合は、大型の甕すべてを移動させるのは困難である。それと同様に、副葬品は移動の負担になるということが考えられる。

そしてもう一点は、一度墓内に納めた死者の「もの」を触るという行為にみる死穢の概念である。事例3の洗骨時には、以下のようなやり取りがあった。

墓内に納めていた食器類が出てきたとき、本島から洗骨の手伝いに来た親族の一人が、その食器は年代物で珍しいから持って帰りたいと言いつつ出た。そして、持って帰るものを選び、より分けて別の場所に置いた。島の手伝い人はこのやり取りを聞いていたのかどうかははっきりしないが、持って帰るものとして取り分けていた食器も含めて、さっと持って行って甕同様粉々に割ってしまった。食器を持って帰りがっていた親族は残念そうだった。

洗骨を行った者は、泡盛で手を洗った。これは骨を触った手をきれいにするためだと説明された。しかし、直接骨に触れていない手伝い人も、泡盛で手を洗っていた。

このように最終的に直接骨に触っていなくとも泡盛で清める行為が行われたことから、墓を開けることによる死穢を清めたうえで、長距離の移動をするにあたって新しい墓に最低限必要なものとして遺骨のみが運ばれたと考えられる。仏壇(位牌)の移動の際には、元の仏壇の香炉の灰は共に移動させることが重視されるが、墓の移動の際には「悪いものがついているかもしれないから持って行かない」という事例もあった。事例3の場合は墓の香炉の灰は新しい墓に移動せず、代わりに海砂を拾って持っていった。事例2でも墓の香炉には、石垣から持ってきた海砂が用いられていた。仏壇の移動と比較した場合にも、墓の場合は死穢が新しい墓に持ち込まれないことが重視されると考えられる。

以上のように墓の移動の場合、遺骨や遺骨に類するもの以外の「もの」はすべて処分される。それゆえに、殊更新たに墓に移入される「モノ」が浮かび上がるといってもいいだろう。墓の移動において元の墓にある遺骨以外のすべての「もの」が排されるがゆえに、元の墓を通じた記憶や故郷観が新たな墓において「モノ」として形を与えられ、移入されたのではないだろうか。

⑤……………現代沖縄におけるメモリアリズムと墓の行方

本稿では現代沖縄の都市部における移住者の墓造りを事例に、新たに墓を造る際に墓に用いられる物質（モノ）の変化に注目して現代沖縄の墓制の変化について考察した。墓に用いられる材質、形状など「新しいモノ」を墓に用いる過程における人と墓の相互交渉を詳細に見ていくことで、墓が記憶媒体として、さらには積極的に外部に向けた表現手段として機能していることが明らかになった。このような墓の記憶媒体化は、これまでの祖先祭祀論の中で議論されてきた「メモリアリズム（memorialism, 追憶主義）」として現象しているのだろうか。最後にこの問題について考えてみたい。

中国東南部の祖先祭祀を論じたフリードマンは、祖先祭祀を二種に区別している。第一は、男系出自に基づいて死者と男系でつながる子孫たちの集団を結束させる祭祀である。これに対して第二は、男系親族の集団が主体となるのではなく各人が個別に行う祭祀であり、そこでは祖先がそれ自身のために記念され追慕される。この行為に対してフリードマンは「メモリアリズム」という概念を当てている。死者を個別に記念し追慕するこの行いにおいて、死者の位牌（tablets）や使用者の名前を記した額（plaques）、あるいは死者の写真が死者の個別性を保持する媒体になっている〔フリードマン1987〕。しかし、祖先に対する祭祀の場所が家庭内の祭壇から祠堂へと移行することに応じて、祖先の存在様態がある転換を遂げる。そこで祖先は、個人的な思い出や愛着の対象となる祖先、すなわち「個別性を保持された祖先」から、リネージ分節の中心となるより疎遠で「没個性化された祖先」へと転換する。祭祀の場所が家庭内の祭壇から祠堂へと境界を越えることにおいて、メモリアリズムの要素が祖先祭祀から払拭されるのである〔フリードマン1991〕。

リネージ組織を欠いたといわれる日本において祖先祭祀の研究を行ったスミスも、メモリアリズムについて指摘している。1960年代に広範な地域の位牌祭祀を調査したスミスは、第二次世界大戦後の日本の変化として、遠い死者に対する祭祀は次第に影が薄くなっていき、近年故人となった親族の者に対してのみ愛情を表現する傾向、すなわち単純化されたメモリアリズムという形で祭祀を執り行う傾向が強くなっていると指摘している〔スミス1996:354〕。首都圏の墓地や墳墓形態の変化を調査した藤井は、スミスを引用しながら近い死者へのメモリアリズムが墓地での慰霊形態に及ぼす変化について論じる。例えば、寺壇関係から民間霊園への志向、塔式から横型の墓への変化、刻字も「〇〇家」から「寂・愛・眠・心・憩」といった抽象文字が目立つようになった。これらの現象は単に形式上の問題ではなく、明らかに質的变化、いふなれば墓を先祖代々の霊の休まるどころと考えるよりも自己の死後の住処と考え、生きざまを刻み、子供との繋がりを志向している。これらは祖先祭祀を象徴する墓というよりもモニュメントとしての墓であり、逆に子孫崇拜への色彩を強めているという〔藤井2003:21〕。

これらの議論を踏まえて沖縄における祖先祭祀を考えてみると、洗骨儀礼や最終年忌が死霊から祖霊化ないし神化する転換期であり、これまで祀られていた位牌は廃棄する、位牌立ての裏に配されるなどして処理されてきた。墓においては、一般的に三十三年忌を過ぎた遺骨を墓内奥の池（イケ）や後生（グショー）と呼ばれる場所に集散的に安置することで、個別の遺骨の「個性」が消滅する機会になっていた〔大胡1972〕。

しかしながら、本稿で取り上げた墓におけるモノの変化からは、逆に墓自体に「個性」を持たせていく過程が明らかになる。その理由について考察してみると、墓があった故郷や家から離れ、遺骨以外に元の墓を構成する「もの」を捨て去るがゆえに、新たな墓に「モノ」として「故郷」や「家の記憶」を宿らせることで祖先や故郷との繋がりを示しているといえる。そうすることで、元の墓・新しい墓という括りを超えて「墓」としての全体性や一貫性を持たせ、場所を隔てて祖先祭祀を継続するために円滑化を図っていると考えられる。つまり現代沖縄における墓におけるモノの変化にみるメモリアリズムは、祖先祭祀を継続するための原動力になっているのではないだろうか。以上の議論を踏まえて、今後も墓制をめぐるミクロ・マクロな動きを追いながら、現代沖縄の祖先祭祀について包括的に捉えていきたい。

【追記】

本稿は、越智〔2012〕及び、2010年に広島大学に提出した博士論文「現代沖縄の死生観に関する人類学的研究—『墓』をめぐる語りと実践を通じて—」を改稿して、新たに考察を加えた。研究の推進にあたっては、科学研究費助成事業（若手研究B、代表者：越智郁乃、課題番号：2470391、研究題目「沖縄における墓地開発と宗教実践に関する文化人類学的研究」）の助成を得ました。ここに記して感謝します。

註

(1)——これらはいずれも火葬骨の収蔵を前提とした墳墓形態である。このような墳墓を備えた集団墓地は、1980年代には以降財団法人、宗教法人が設立主体となって増加し、経済発展に伴い1990年代以降には急増した。その背景には、墓埋法や都市化の影響で都市部では個人の所有地には県からの墳墓建設認可が下りにくい状況があり、宗教法人や財団法人立の集団墓地へ墓を求めるものが増えたことが予想される。さらに集団墓地は草刈りの必要がないため管理がしやすく、駐車場やトイレが設置されているという点で、墓参りや清明祭などの際にも便利という価値付けがなされている。

沖縄県における火葬率99%を超えた現在、新たに建設される墓の多くにおいて、その内部構造は納骨する空間のみである場合がほとんどである〔加藤2004：90〕。

(2)——この都市計画による墓地整理の様子については、加藤による詳細な報告〔加藤2010：32-50〕を参照

されたい。

(3)——2005年に行った公益法人墓地業者（沖縄本島中部）への聞き取りによる。

(4)——B円とは1948年から1958年まで使用された米軍票の通貨である。当時のB円に対する日本円のレートは1B円につき約3円であったという。本事例では、9600B円で約80坪の土地を購入後、登記にかかる費用などで最終的に24000B円かかり、それを16株で頭割りし、一株あたり1500B円の出費となったという。

(5)——ここで言う「門中」は必ずしも親族集団を意味しない。奥では模合等によって同じ墓を利用していた集団が、移住先の沖縄中南部の門中墓のシステムにならって「門中」と呼んでいる。

(6)——一人の株持ちに対する同門中の賛同出資者は、いない場合もあるし、多いところで8名、平均して3、4名である。

- (7)——労働に参加できない場合は、成人一人当たり男性1ドル、女性50セントを支払ったという。
- (8)——郷友会及び出身村である奥地区からの1万ドルの出資金を得て造墓した。
- (9)——聞き取りによると、三～四代の上位世代の遺骨を墓から出し、砕いて一つにまとめて持ってきたという。このように上位世代の遺骨を移動の際にまとめる行為は、筆者の調査によると、八重山・宮古地域からの移動の際にも見受けられる。詳細は越智〔2009b〕を参照されたい。
- (10)——年表については40周年記念時に作られた『共同墓地組合誌』を基に、共同墓地組合長経験者である男性(70歳代)とその親族男性(50歳代)に聞き取りを行い、筆者が作成した。
- (11)——年会費は1500円、清掃は年3回行うことが規約に明記されている。また連名で購入した土地は、法的には個人名義ということになるが、会の承認を受けずに売買できないよう規約を設けている。
- (12)——沖縄では旧暦で行事を行う場合、新聞、テレビ等のメディアでは行事の最初に「旧」を付けて呼称することが多い。例えば、お盆は「旧盆」、十六日祭は「旧十六日祭」とする。実際は地域ごとの方言による呼び方や、「旧〇〇」が混在しているが、本稿では統一する。
- (13)——もちろん王墓などの「伝統的な墓」に対しても改修は行われているが、それはその歴史文化財を管轄する国や市町村による保存目的のためであり、成員権を持つ親族が行うわけではない。
- (14)——同窓生名簿を基にした居住地調査による。
- (15)——改葬許可証は遺骨一体毎に申請されるため、申請者実数から移動件数を算出した。
- (16)——沖縄では一般に「野辺送り」を行い、墓に到着して墓口を開ける時間は夕方の引き潮が理想的とされている〔名嘉真1999:51-52〕。
- (17)——引き潮の際にしか墓口を開けられないとなると、当日の午前3時に与那国の墓口を開けて遺骨を出し、飛行機で移動し、午後3時に沖縄本島の墓口を開けて納骨せねばならないのである。
- (18)——焼骨には火葬場が用いられることがあるが、与那国には存在しないため、墓庭の一角でバーナーを使って焼く。島内の墓の移動の場合は、洗骨を終えた遺骨を納めた甕を移動するだけであるが、島外への移動の場合は、甕から遺骨を出して焼く。その理由としては、遺骨に生えたカビなどを焼くため、遺骨の体積を減らして運びやすくするためであると説明される。
- (19)——墓内の甕には「銘書(メガチ)」といい、被葬者の名前、生没年などが記される。また、墓内に墓誌状の被葬者に関する記録が残されている場合もある〔高良1989:41〕。
- (20)——八重山民俗誌には井戸掘りや墓造りの際にトゥディクン(土地君)の祭りというチチマチリ(地鎮祭)を行うとの記述がみられる〔宮城1972:445-451〕。

参考文献

- 朝岡康二 1989「島の手づくり建築」『建築文化』第44巻第515号 彰国社
- 朝岡康二 1996「民具研究と文化学—民具研究の将来像を求めて」『歴史と民俗』13号 平凡社
- 朝岡康二 1999「民俗学的な資料としての『モノ』とその記憶」国立歴史民俗学博物館編『民俗学の資料論』
- フリードマン、M. 1987(1966)『中国の宗族と社会』田村克己・瀬川昌久訳 弘文堂。
- フリードマン、M. 1991(1958)『東南中国における宗族組織』末成道男・西澤治彦・小熊誠訳 弘文堂。
- 藤井正雄 2003「現代の墓地問題とその背景」比較家族史学会監修、藤井正雄・義江彰夫・孝本貞編『シリーズ比較家族第I期 家族と墓〔新装版〕』早稲田大学出版会
- 平敷令治 1995『沖縄の祖先祭祀』第一書房
- 石原昌家 1986『郷友会社会—都市のなかのムラ—』ひるぎ社
- 加藤正春 2001「奄美・沖縄における火葬の導入と普及過程」ノートルダム清心女子大学生活文化研究所『生活文化研究所年報』14:87-124
- 加藤正春 2004「火葬と沖縄の葬儀—火葬の導入による葬儀の再編成とその外部化」ノートルダム清心女子大学生活文化研究所『生活文化研究所年報』17:87-113
- 加藤正春 2010『奄美沖縄の火葬と葬墓制—変容と持続—』榕樹書林
- 名嘉真宜勝 1979「沖縄県の葬送・墓制」名嘉真宜勝・恵原義盛共著『沖縄・奄美の葬送墓制』明玄書房
- 名嘉真宜勝 1999『沖縄の人生儀礼と墓』沖縄文化社
- 宮城 文 1972『八重山生活誌』沖縄タイムス社

-
- 越智郁乃 2008「墓と故郷—現代沖縄における『墓の移動』を通じて—」『アジア社会文化研究』第9号アジア社会文化研究会
- 越智郁乃 2009a「『墓の移動』を通じた『沖縄』研究の再考」『アジア社会文化研究』第10号 アジア社会文化研究会
- 越智郁乃 2009b「遺骨の移動からみた祖先観—現代沖縄社会における墓の移動に関する一考察」『沖縄民俗研究』27号
- 越智郁乃 2010「現代沖縄の死生観に関する人類学的研究—『墓』をめぐる語りと実践を通じて—」(博士論文)
- 越智郁乃 2012「墓と人のエージェンシー—現代沖縄における墓の変容を事例に—」『アジア社会文化研究』第13号 アジア社会文化研究会
- 越智郁乃 2013「『この世の家』と『あの世の家』—現代沖縄における家屋・墓・仏壇の移動と「家」の継承をめぐる—」小池誠・信田敏宏編『生をつなぐ家』風響社
- 小川 徹 1987『近世沖縄の民俗史』弘文堂
- 大胡欽一 1972「祖霊観と親族慣行」日本民族学会編集『沖縄の民族学的研究—民俗社会と世界観』民族学振興会
- 沖縄県土木建築部住宅課 1996『昭和60年度 沖縄型住宅開発研究報告書』沖縄県土木建築部住宅課
- 沖縄県福祉保健部 2000『沖縄県墓地公園整備基本方針』沖縄県福祉保健部
- 酒井卯作 1987『琉球列島における死霊祭祀の構造』第一書房
- スミス, R.J 1996 (1974)『現代日本の祖先崇拜 文化人類学からのアプローチ』前山隆訳 お茶の水書房
- 高良倉吉 1989「歴史としての墓」『シンポジウム南島の墓 沖縄の葬制・墓制』沖縄出版
- 谷 富夫 1989「過剰都市化社会の移動世代—沖縄生活史研究—」広島女子大学叢書 溪水社
- 戸谷 修 1999『アジア諸地域の社会変動—沖縄と東南アジア』お茶の水書房
- 渡邊欣雄 1994『風水 気の景観地理学』人文書院
- 渡邊欣雄 2002『沖縄文化の拡がりの変貌』榕樹書林

(福井大学産学官連携本部, 国立歴史民俗博物館研究協力者)

(2013年12月21日受付, 2014年5月26日審査終了)

表 4 沖縄県墓地経営主体別許可件数

	合計		市町村		財団法人		宗教法人		その他		個人墓地	
	許可数	基数	許可数	基数	許可数	基数	許可数	基数	許可数	基数	許可数	基数
1960	6	6									6	6
1961	4	4									4	4
1962	4	4									4	4
1963	6	544	1	539							5	5
1964	8	8									8	8
1965	7	7					1	100			7	7
1966	11	110									10	10
1967	12	12									12	12
1968	8	1012	1	1007					2		5	5
1969	3	3									3	3
1970	4	4									4	4
1971	5	5									5	5
1972	1	1									1	1
1973	1	113	1	113							0	0
1974	5	5									5	5
1975	12	12									12	12
1976	27	27									27	27
1977	27	1245	2	1220							25	25
1978	54	54									54	54
1979	74	174			2	105			3		69	69
1980	62	157			1	77			1	20	60	60
1981	74	145	1	72							73	73
1982	120	622	1	427	1	77					118	118
1983	110	772	1	535	1	73	1	58	1		106	106
1984	136	661	1	379	2	100	1	50			132	132
1985	135	1104	3	693	3	270	1	13			128	128
1986	114	180					2	68			112	112
1987	158	479	1	174	1	70			1	80	155	155
1988	144	284	1	80			1	43	1	20	141	141
1989	163	163									163	163
1990	229	996	2	646					1	124	226	226
1991	213	297					2	86			211	211
1992	173	719			1	23	2	526			170	170
1993	323	1310	2	530	2	143	2	320			317	317
1994	281	660	1	72	1	76	1	170	1	65	277	277
1995	329	684			5	151			4	213	320	320
1996	258	9982			4	175	3	9496	10	70	241	241
1997	197	1451	1	116	3	270	4	787	3	92	186	186
1998	381	1002			1	269	1	265	1	90	378	378
1999	307	1341	1	49			2	988			304	304
2000	415	578	1	30	1	36	1	34	2	68	410	410
2001	561	1120	1	268			3	295			557	557
2002	379	560	1	185							375	375
2003	343	891					3	551			340	340
2004	328	895	1	10			4	562			323	323

註 (1) 年号 はユンヂチの年。
 (2) 個人墓地の基数は許可数=基数として算出。
 (3) 墓地理葬法、都市計画法、土地区画整理法に基づく許可及び認可資料) 沖縄県業務衛生課調べ。表作成は筆者による。

Tomb as Memory Storage Medium and Change of Tombstone Materials : A Study on the Grave System in Contemporary Okinawa

OCHI Ikuno

Today, the environment and situations around Okinawan grave system are changing dramatically. Graves have changed as migration of people to main island of Okinawa and the urbanization of it progressed after 1945. Senkotsu (cleansing the bones of the dead) practice became extinct due to rapid increase of cremation and it led to smaller tombs. Concrete made it possible to build tombs on flat land, instead of digging into slope ground and the shape of graves changed greatly. Graves became object of governmental management due to the birth of common grave from the urban planning of the 1950' and the application of Act Concerning Graveyard, Grave, etc. of Japan at the time of the Reversion of Okinawa. As the economy developed in the 80's, Japanese gravestone dealers started business in Okinawa. Okinawa's grave has changed not only its shape but also its location over the years. People, who migrated to the urban areas of the main island of Okinawa after the WWII, brought their graves that are essential to their religious practice of ancestral ritual to their new homeland. There are people who have even brought their ancestors' remains from the original graves. As people migrate, graves migrate. However, the changes in religious practice of people and recognition of graves associated with it are not studied or discussed well by existing grave system studies or grave feng shui studies.

In this paper, I would like to discuss grave construction of migrants from Yaeyama and northern region of main island to urban areas of modern Okinawa as case studies. The change in the grave system of modern Okinawa will be discussed by focusing on the changes of building materials for tombs: How new building materials were introduced, how they were used, how they transformed while functioning as tombs.

Key words: Urbanization, Family Grave, Cemetery, Memories, Homeland
